東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 25 号（2021）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies*, Vol. 25 (2021)

# 国際ワークショップ　文化の翻訳、文学の翻訳

## ～ベンガルから日本へ、日本からベンガルへ～

丹羽京子

FINDAS（南アジア研究センター）ではこれまでさまざまな国際ワークショップおよび国際シンポジウムを開催してきましたが、今回は「ベンガル語ベンガル文学の総合的研究（科研基盤 C 代表：丹羽京子）と共催で、ベンガルと日本の文化交流および翻訳をテーマに国際ワークショップを開催しました。

このワークショップの目的は、まずこれまでベンガルから日本、日本からベンガルへとばらばらに行われてきた翻訳紹介を双方向のものとして捉えるための鳥瞰図を得ることにありました。これにより日本とベンガルの関係史において新たに見えてくるものがあると考えてのことです。それぞれの翻訳紹介者はそれほど多く存在するわけではないにもかかわらず、これまでひとりひとりが孤立して仕事を進めることが多かったこの分野で、お互いに顔を合わせて意見を交わす意義は少なくなかったと思われます。また、発表者は各々日本文学もしくはベンガル文学の研究者ですが、翻訳の経験を持つものもおり、研究のみならず翻訳の現場からの視点も加味したものとなりました。

発表は二部に分かれて行われました。第一部は「日本への眼差し、ベンガルへの眼差し」という題目で、ベンガルと日本、それぞれの翻訳紹介の場でなにが起こっていたかについて二人の発表者にお話していただきました。最初の発表者、ダッカ大学教員のロパムドラ・マレクさんは、“Japanese Prose and Poetry translated in Bengali Language: 1863-1971” と題して、ベンガルにおける初期の日本紹介を中心に、バングラデシュ独立の 71 年までにどのようなものが翻訳紹介されてきたかをクロノロジカルに整理、紹介してくださいました。ロパムドラさんの研究は地道に過去の翻訳紹介を掘り起こすもので、おそらく最初の日本紹介であると思われる『ペリー提督日本遠征記』（1856 年出版、英語原文からのベンガル語訳は 1863 年に出された）のベンガル語訳からはじまり、種々の日本紹介や日本文学のベンガル語訳についてその変遷とともに説明がなされました。これらの古い翻訳書は、翻訳者のプロフィールやもとのテキストが不明であることが少なくないのですが、参加者の指摘によって一部判明するということもありました。

二番目の発表者、青山学院大学博士後期課程の新田杏奈さんは、「日本におけるタゴール翻訳の歩み――近代文学・思想との接点を中心に――」と題してタゴールの初期の紹介――そのすべては英訳からの紹介だったわけですが――がなぜ当時の日本でインパクトを持ったのかについて分析してくださいました。日本におけるタゴール受容の研究は過去にも多少なされてきましたが、これまでは当時（大正時代）の日本の思想的特徴や、タゴー

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ルの哲学的あるいは宗教的側面に注目したものがほとんどであったなか、新田さんの視点は日本文学、特に当時の詩潮との関連に光をあてたもので、これまであまり検討されてこなかった一面が明らかになったと思います。新田さんは当時の詩壇の自然主義、反自然主義の攻防のなかにタゴール翻訳を位置づけ、詩誌「未来」との関連を指摘し、この種の研究に新たな光を当てました。

第二部は「日本語からベンガル語へ、ベンガル語から日本語へ」と題して、相互の具体的な翻訳の場面での問題を検討しました。まずハイデラバード外国語大学教員のタリク・シェイクさんに、「蕉風俳諧のベンガル語訳を巡って」というテーマで話していただきました。タリクさんは、はじめにベンガルにおける俳句のイメージと俳句／俳諧を巡る誤解について解説されたのちに、『芭蕉七部集』より「冬の日」をベンガル語に訳しながら、その際に直面する様々な問題について検討してくださいました。切れ字や掛詞といった俳諧翻訳の問題をさまざまな角度から検討し、ベンガル語訳を提示する試みは刺激的でもありました。

最後に丹羽が「『十二か月の家と世界』を訳す」と題して、現代ベンガル詩人ジョエ・ゴーシャミの連作「十二か月の家と世界」を試訳するとともに、ベンガル語を日本語に移す際の問題などを検討しました。「十二か月の家と世界」は一見それほど難解な詩ではありませんが、その背景にはベンガルの伝統的な「バロマシ」と呼ばれる季節の詩が存在しており、この詩のエッセンスは、そのような伝統に捻りを加えることで現代に生きる「十二か月」の詩になっているところにあります。そのような文化的文脈を反映することは可能かどうか、そしてまた個々の語句や表現のスタイルなど、詩の翻訳の際に考えるべき問題をひとつひとつ指摘しつつ、第一稿から修正を施した第二稿へと進めていくという流れで発表を行いました。

コメンテーターをお願いしたのは、三島由紀夫の『金閣寺』や村上春樹の『海の上のカフカ』を訳されたジャドブプル大学教員のオビジット・ムカルジーさんです。オビジットさんはひとりひとりに対して丁寧なコメントをつけてくださり、各々が今後の宿題を持ち帰ることになったと思います。今回初めてこのようなワークショップを開催しましたが、これらの意見交換などをふまえて続編も開催してみたいと考えています。

国際ワークショップ：文化の翻訳、文学の翻訳
〜ベンガルから日本へ、日本からベンガルへ〜
2021 年 9 月 25 日（土）14:00 〜 17:30
FINDAS および丹羽科研共催（オンライン開催）

報告：
Lopamudra Malek（University of Dhaka）
新田杏奈（青山学院大学）
Tariq Sheikh（English and Foreign Language University）
丹羽京子（東京外国語大学）
コメント：Abhijit Mukherjee（Jadavpur University）

共催：
人間文化研究機構 南アジア地域研究 東京外国語大学拠点 南アジア研究センター(FINDAS), 科研:18K00496「ベンガル語ベンガル文学の総合的研究」(基盤C)代表：丹羽京子

# 国際ワークショップ
# 文化の翻訳、文学の翻訳
# ベンガルから日本へ、日本からベンガルへ

**２０２１．９．２５（Ｓａｔ）**
**１４：００－１７：３０　日本時間　Ｚｏｏｍ開催**

１０：３０－１４：００　インド時間　１１：００－１４：３０　バングラデシュ時間

**一般公開・要予約**
（参加をご希望の方は、Zoomをインストールの上、QRコードより９月２２日（水）１７時までにご応募ください。）

## 第一部　日本への眼差し、ベンガルへの眼差し

- “Japanese Proses and Poems Translated in Bengali Language: 1863-1971”
  Lopamudra Malek（University of Dhaka, Bangladesh）
- 「日本におけるタゴール翻訳の歩み ―近代文学・思想との接点を中心に―」
  新田杏奈（青山学院大学）

## 第二部　日本語からベンガル語へ、ベンガル語から日本語へ

- 「蕉風俳諧のベンガル語訳を巡って」
  Tariq Sheikh
  （English and Foreign Language University, Hyderabad, India）
- 「『十二か月の家と世界』を訳す」
  丹羽京子（東京外国語大学）

コメンテーター：Prof. Abhijit Mukherjee （Jadavpur University, India）
司会　　：萬宮健策（東京外国語大学）

Contact:　東京外国語大学南アジア研究センター(FINDAS)　findas_office@tufs.ac.jp